

1954年ビキニ環礁でのアメリカ水爆実験

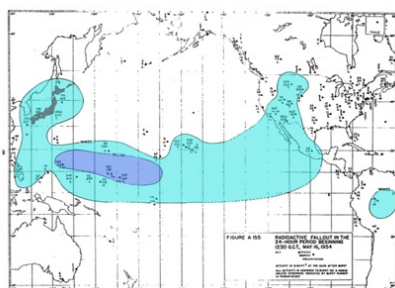
キノコ雲の下で操業し、被爆した船は確認できただけでも延べ992隻にのぼり多くの若者が被ばくしました。その“X年後、



放射線を浴びた 年後

伊東 英朗 (RNB) メディア情報センター ディレクター

みん
な
の
こ
ろ
う
民
放
史
題
字
中
川
順



水爆実験で放射能汚染された太平洋エリア図(アメリカ原子力委員会)

「第五福竜丸事件」をご存知でしょうか。
『1954年3月、マグロ漁船第五福竜丸が、アメリカが行った水爆実験によって被ばく、通信長の久保山愛吉さんが、急性放射能症で亡くなった事件』
多くの人がそう記憶しているのではないのでしょうか。
しかし、この記憶には多くの間違いがあります。
一つは、太平洋のマグロ漁場で行われた核兵器実験は、1954年3月だけではなく、1946年、広島・長崎に原爆が投下されたわずか10ヶ月後に始まり、1962年までの17年間に、英米によって100回以上行われているのです。



1954年 被爆した魚を漁獲した位置図

もう一つは、操業していたマグロ漁船は、第五福竜丸だけではありませんでした。1954年、放射能検査が行われたマグロ漁船は、

10ヶ月間だけで延べ2729隻ありました。少なくとも、1年間で延べ3000隻以上の船が、第五福竜丸と同じ海で操業していたことになります。
さらに、核兵器実験で被ばくした船は、マグロ漁船だけではなく、捕鯨船、貨物船、カツオ船など、太平洋を航行した船も被ばくしたのです。

●日本にもビキニの灰

太平洋の中央部で行われた核兵器実験で生み出された強烈な放射性物質は、風に乗って、太平洋を東

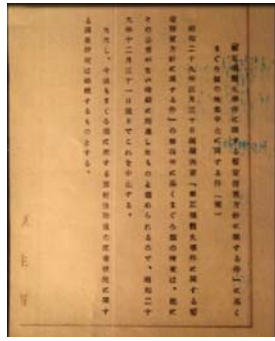
しかし政府は：

へ広がり、およそ1週間でアメリカ大陸に到達。そして、西に広がった放射性物質は、およそ2週間で日本列島に到達したことが、実験を行ったアメリカ原子力委員会の資料で明らかになっています。もちろん、海水も強く汚染し、様々な魚が汚染しました。

核兵器実験が行われたのは、1946年から1962年の17年間、100回以上に及びます。

魚の放射能検査が行われたのは、そのうち、1954年のわずか10ヶ月間のみです。

日本政府は、1954年安全宣言をし、同年12月31日、すべての放射能検査を打ち切ったのです。



放射能検査打ち切りの公布文書

さらに200万ドルと引き換えに、すべての責任を問わないとする文書をアメリカと交したのです。そのため1955年1月1日から、全ての魚が水揚げされました。

1954年5月、22人の科学者と新聞記者やカメラマンを乗せた日本政府の調査船俊鵬丸が爆心地付近を目指し出航。海水、大気、魚が激しく放射能汚染していることを観測、記録しています。

核実験中、日本列島を核実験による放射能が襲いました。当時、魚の廃棄基準は毎分100カウンツ(CPM)と定められていました。ところが、日本列島に降り注いだ雨は、その基準をはるかに超えるものでした。京都では86、000CPM、東京では32、000CPM、沖縄110、000CPM、鹿児島240、000CPM、福岡350、000CPMととても高い放射能が降り注いだのです。

『雨に濡れると髪の毛が抜ける』という言葉覚えてしている人は多いのではないかと思います。実は、根拠のある言葉だったのです。しかし、いつの間にか、ことわざだと思われたり、酸性雨の仕業だと思われるようになってしまったのです。

私が、この事件に出会ったのは

2004年春。「高知県に第五福竜丸以外の被ばく者がある」と耳にしたのがきっかけでした。そのような事に驚いたのは事実ですが、それよりもこれだけの大規模な事件がメディアの手でほとんど触れられていないことに驚き、半信半疑な思いだったことを覚えています。



日本列島放射能の測定記録(1956-58年)

もともと幼稚園の先生を16年間していましたので、2004年は、まだディレクターとしても駆け出しの頃でした。報道部の経験もなく、調査報道の方法も何も知らないで取材を始めたのです。『事実を知りたい』：その一念でした。しかも露出する枠が決まっているわけでもなく、何もかもが中途半端

なところからのスタートでした。これまで数千時間に及ぶ取材の最初のカットは、高知県宿毛市内の浦、海岸沿いにある神社の前に立つ一人の男性の姿から始まっています。神社の周りには満開の桜が揺れていました。

挨拶をすると電話で取材をお願いしていた男性は「自分についてきなさい」と言うと言いきり始めました。私とカメラマンの三本は、黙って男性についていきました。

平静を保っていました。初めての取材でもあり、真つ白なキャンバスに何を描き始めればいいのか何も決まっておらず、心の中は不安でいっぱいでした。

男性の名は、元遠洋マグロ漁船新生丸乗組員の山下幸男さん。取材の後、亡くなっています。



山下幸男さん

新生丸は、操業中、マスト横の棒に死の灰が積もったと言われています。ところが、政府の放射能検査に記録が残っていない謎の船なのです。2004年当時で、19人の乗組員中、生存者はわずか2人。当時、第五福竜丸の乗組員の約半数が生存していたことから



新生丸

被害の大きさが分かります。

人がやつと通れる路地を過ぎると、山下さんは、私たちを自宅に招き入れてくれました。

取材を始めた数年は、信頼できる三本カメラマンと2人で取材を行っていました。三本とは「とにかく語り始めたら顔だからな。余計な映像はいらない」と相談していました。彼の証言がすべてで

と。

●証言①ガイガーカウンター

魚は捨てさせられた

山下さんは、コタツに入ると、僕の方を見ました。

『質問しなくちゃならない』

そう思った瞬間、僕はこう切り出してしまったのです。

「水爆実験のことを覚えてますか？」

今、考えるとそんな唐突な切り出し方はないだろうと思います。

そんな質問をすれば、相手は警戒ししゃべることもしゃべらなくなってしまうに違いありません。

ところが、山下さんは、静かにこう切り出したのです。

「何年の何月ということは忘れたがよ。」これまで取材したほとんどの乗組員たちは、このエクス

キューズから始まります。《せつかく来てくれたけど、たいした話ではないよ》という優しさから出る言葉なのだろうと私はそう受け

取っています。山下さんは、続けます。

「当時マグロ船に乗りよってね、もう50年前やけん、たどたら年数出てくると思う。ビキニの近く

におったらしいですね。」

その時分だから船同士の連絡は無線で、陸からも無線の連絡だったからね。

無線でビキニ事件があったが、福竜丸が被害にあったということ

を無線で聞いてね。我々に無線士が報告しただけでしたね。私は甲板員で、詳しいことはぜんぜん分

からんけど。操業しよって、危険区域では無かった、ちよつと離れ

とった。



水爆実験のキノコ雲

操業は中止して東京に入航、帰っては来ましたがね。帰って来たら上陸禁止という事で、『船に係官が調べに来るまで船に居れ』言うがで、船に一泊した。あくる日、係官がガイガーカウンターですか、機械で各人調べて。被害の原爆にかかちよるか、かかちよらん

かということの報告もなしに、ただ船と人間と調べて帰っただけだと思いがね。あとは魚を揚げてもいかにいうことで、また東京から2日、2日も走ったかどうか、そのくらい走ってから魚を沖で放棄したですかね。そのビキニの時は、その程度しか覚えちよらんです。

それからあと、2、3年たつてもう一ぺん(1957年第8達美丸、クリスマス島の水爆実験を全

員が目撃)クリスマス島ですかね。

●雪みたいな粉がチラチラ

その実験にも別の船で遭遇して、その時は原爆の光見たんですよ。

夜8時やったと思いますが、きれいな晴天のはずやのに稲光みたいな光がありまして、稲光言うより

か青白い閃光で、目に堪えるような光でしたがね。他の人間が『こ

りや原爆ぞ!』言うて冗談めかしたようなことで騒いでおったけど

ね。その後5分か10分くらいする間に水平線が赤くなつたんですよ。

太陽が沈むみたいな、丸い太陽の倍もあるような大きな塊が浮かんで

ね。

『あー、やつぱり原爆やったねえ』

言うて騒ぎよったらそれがどんどん膨れ上がって、その光が2重になつてだるま型みたいになつて、みるみる間にずーっとどんどん広がって、空一杯とまではいかんけど、かなり広い範囲に広がってね。広がるにつれて薄うなつてしまつて、で消えたんですがね。

我々もその時分に原爆がそんな命を落とすとか、そんな怖いものというような認識は薄かつたからね。それからもう皆、その話は忘れとつたけれど。

忘れて操業に夢中になつとつたけどね。20〜30分もしたかせんかぐらいいね、夜やけんライトをあけて操業しよる、そのライトの光に雪みたいな粉がチラチラしだして、『こりや死の灰や』いうて騒いでね。私らも怖がつてはおらざつたけど何か気持ちが悪うて、私は船の陰に隠れた記憶があります。

それが何ぼも続かんかった、2、3分、5分も続いたか、すぐ晴れましたけど。それが後で思つたら『原爆の灰やつたかな』という風に感じたんですがね。まあ記憶に残つちよるいうたらそれぐらいなことですね。」

山下さんの言葉は、あまりにも衝撃的でした。広島、長崎以外で、キノコ雲を目撃した日本人がいる。自分自身の歴史観が崩れ落ちる瞬間でした。

しかも、山下さんは、数え切れないほどの数の被害者の一人に過ぎないのです。キノコ雲が目視できる距離、激しい放射線を出す死の灰。彼らは、想像を超えた被ばくをしているはず。そして、被ばくによつてどのような健康被害が出ているのかについては、まったくわかつていないのです。こたつに入り、話を聞いていた私は、被ばくによつて、この日本で何が起こっているのか想像し、寒気がしました。

山下さんは続けます。

「その船に乗つちよつた人間がどんどん50代60代で亡くなつて、『原爆の関係があるんかなあ』と思うてましたが、その当時荒くれ人間と言うか命知らずみたいな人間ばかりの集まりでしたから、それで原爆のことを後々まで伝えるという話もないし、それに『わしらは原爆におうたぞー』いうて人に話しても、あまり関心が

無いんです。半信半疑みたいなこととで話も続かんし、最近まで原爆におうたことは忘れておりました。原爆が関係で早死にしたのか、我々乗り込んだ人間がどんどん逝つたということとは、元氣な人らがガンとか何とかで死んでしもたということとは、やっぱり原爆のせいやろかな、とは思いますけど。」

被ばくをしたことははっきりしていても、そのことによつて何が起こっているのか調査も行われないまま、そして医学的に裏付けることもできず、不安だけを抱え、生存者は生きていくしかないのです。そして、乗組員たちは、自らの死をもつて事実を伝えるしかないのです。

もう一人、忘れられない生存者がいました。山下さんの近所に住む伊予田哲夫さんです。伊予田さんも取材の後、亡くなりました。

「原爆のやつかい？おやじも死んだけん、資料ももう無い」

伊予田さんの一言目は、その言葉から始まりました。「資料というのは？」と聞くと、伊予田さんは「航海日誌よ」と答えます。

伊予田さんの父親は、山下幸男さんが乗った新生丸の総責任者である漁労長でした。お父さんの話を聞こうと思ひ訪ねたのです。ところが、伊予田さんは続けてこう話し始めたのです。



「ドウオン、ピカピカピカ…」

「わしらが見たのはのう、もう何回かやつちよるがの。色んなところでやつちよらい。わしらも見たけど、親父が見たのとは違う。わしらは後よの、1回か2回はあつじや思う。」

●証言②船は真昼になった

みんな若く死んだ

うちらの場合は通信がきた、『写真は撮るな』と。わしらは、写真んは撮らんけど中にはまれという無線は陸から来た。近くでや

るけん、はじめは稲光と言うか、ピカピカピカピカしよった。ドン言うたら、もう橙色になった、キノコ雲みたいになって、橙色。船は昼になった、すごいよあれは、橙色よ。はじめ青かったね。なんで橙色になったかねあれ、すごいわ」

驚くことに伊予田さん自身もマグロ船昇栄丸に乗り、被ばくしていたのです。

伊東「音も聞こえましたか？」

伊予田「聞こえた聞こえた。相当離れちよるにねえ、ドウオ——ンいう音よ。ねきで聞いたらすごい音しよるぜ。わしら相当離れても、あれば聞こえるけんのう。初めピカピカピカピカやつたのう」

伊東「どの程度の大きさでした？」

伊予田「どの程度言うたてね、稲光の太いのぐらいで、ピカピカピカ。で、連絡来ちよったから『あー、あれかねえ、あれにしては小さいなあ』言いよった。5、6回、7、8回ピカピカなつたかねえ。

『あんなんかね、水爆はあんなこととはない』言いよつたら来たきん。ドウオ——ン言うたもん。ありやあどうせ何かの先走りやの、爆発する前の。あれ日本の上に落と

した、いうたらええことないぜ」(笑う)

伊東「写真撮られんと言うのは？」

伊予田「『眼鏡でも見るな、写真を撮るな』……と言うてきた。あの時分やけん、そうとう近くで皆しとる。うちの親父らはちようど近くに居ったけんね」

伊東「お父さんの船は？」

伊予田「新生丸です。親父は3回も4回も行つちよる。うちの親父が一番見とらせんか？原爆は、死んだ親父がの。ずっと昔から船長、漁労長やけん。わしらが見るまで2、3回見た言いよった。やけん5、6回は見ちよるぜ、親父は。何回かやつちよるぞ相当、あそこ

で。やつちよる、やつちよるはずじゃ。皆。うちらでも10人、親父が連れていつちよるけど。みんな早よ死んでしもたわ。みんな若死にじゃの。」

伊東「仲間が亡くなった時のことを覚えていますか？」

伊予田「昔のことやけんの、今やつたらじきに分かるけん、もう何十年も前に死んじよるけん。うちの親父と一番最初に乗った人が玉田マサキチいうての、コック長じやつた。これは親父とずーっと

一緒やけん。その人が死んだ時には病院からわし連れてもんだけど、大熱じやつた。触れんばあ熱かつたね」

伊東「それは亡くなつてゐる状態か？」

伊予田「亡くなつてゐる状態ですよ、大熱で死んだけんね。あの時分は土葬やつたけんね、送る時もポツポシよったよ。3日もたつちよるに、すごい熱じやの。わしが病院からもどるに、車で抱いとるのに手が汗でボトボトしよつたけんね。相当の熱じやつた。土葬で送る時もポツポシよった、3日も経つてゐるのに」

取材を始めて12年目。昨年、元旦から取材が始まりました。

36歳で亡くなつた乗組員の娘、

川口美砂さんが、地元、高知県室戸市で被ばく者や遺族の聞き取りを始めたのです。70人に及ぶ被ばく者や遺族の聞き取りを行ったのです。その聞き取りの一部始終に密着し、映画を完成させました。

この12年間を振り返り思うことがあります。今年に入つて思いがけないほど生存者が見つかったことに驚いています。これは奇跡だ

と思うのです。激しく汚染した爆心地で操業を繰り返し、80代まで生存していることが信じられないのです。

しかし、事実として生存しているのです。これは何かメカニズムがあるのではないかと勝手に思っています。そして、そのメカニズムを説明することが、これからの被ばくの問題解決の糸口になるのかもしれないと思っています。

ただ一つ、実感として言えることは、12年前に聞き取りをし、亡くなつた数十人の人たちの証言の方が、現在生存している人たちよりも激しいということです。

これは自分自身の実感でしかありませんが、強い被ばく体験した人の方が早く亡くなつてゐるように思うのです。

いづれにせよ、マグロ船、貨物船、捕鯨船など多くの船が被ばく、日本列島が汚染、アメリカ大陸が汚染したこの世界的な被ばく事件が解明されることは当然のことだと思ひます。より多くの人に事件に関心をもってもらい、より多くのメディアや科学者が、事実解明に携わってくれることを願っています。

「資料提供」 筆者 南海放送